

— 『富士古文献』を通じて見る —

## 古代史の歴史認識

神奈川徐福研究会 伊藤健二

### 1. 『富士古文献』と問題の所在

富士山麓の宮下家に、膨大な量の『富士古文献』（『宮下文書』とも言う）が残されている。内容は、『古事記』や『日本書紀』のように一つにまとめられたストーリーではなく、神代の時代から、南北朝の時代まで種々雑多な歴史記録である。その中の一部に徐福や徐福の子孫などが書いたと記されている、いわゆる「徐福十二史談」がある。

『富士古文献』は、文体や内容から近世に書かれた偽書とされ、アカデミズムからは相手にされないが、一部の在野の研究者からは、正しい歴史が記されているとして支持されている。しかしこのたぐいの「古文書」が歴史を反映していかどうかの議論は往々にして水掛け論におわり、実りのないものである。実害のないものであれば放っておけばいいのだが、中には古代史を装いながら、近代日本の「日本はアジアの盟主」の思想が色濃く反映されている部分もある。徐福の口を借り、誤った古代史観が語られているのであれば、徐福の名誉にかけて、これは指摘しなければならない。

#### 参考：『富士古文献』と『神皇紀』

大正時代、三輪義瀨（よしひろ）氏が『富士古文献』の内容をダイジェスト版としてまとめ、『神皇紀』として出版した。しかし『富士古文献』と比較すると、大正時代の知識が入り込んでいたり、公表するにははばかれる、「中国皇帝の先祖は日本から神が天下った」「日本の神々の一部は中国から来た」などの部分が記載されていない。『富士古文献』を解説する上で、『神皇紀』は非常に役に立つが、大正時代という制約の中で書かれたものであることは認識しなければならない。なお、この『神皇紀』は、神奈川徐福研究会が、現代語訳を行い、2011年に出版した。

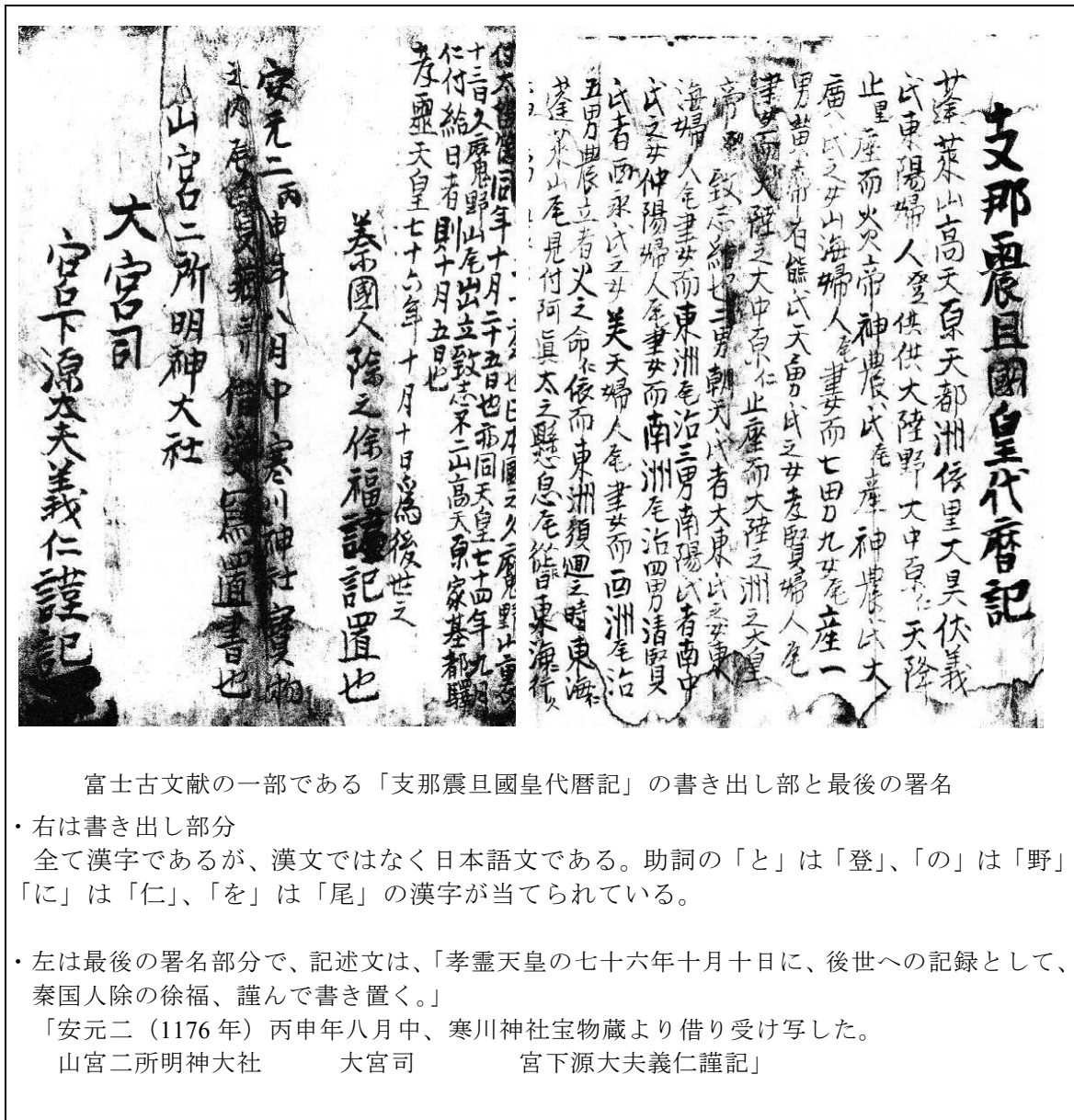
### 2. 『富士古文献』の偽書論争

『富士古文献』は、雑多な文章の寄せ集めであるが、ここでは、徐福が書いた十二の書とされる「徐福十二史談」に限って考える。この文中には、明治時代に定められた「紀元」の年号を使っていることや、使われている用語が、「国民」、「軍人」、「帝国」、「軍隊兵卒」、「政治」など、近代の単語が使われていることから、明治時代に書かれたと考えられるが、江戸時代に書かれた部分もある、との指摘もある。しかしいずれにしてもとても徐福の時代にさかのぼれる文章ではない。この点は、『富士古文献』を基本的に支持する伊

集院卿氏も、著作『富士王朝の謎と宮下文書』の中で指摘しており、これは書き写しを繰り返すうちに、文体が新しい時代のもととなり、また新しい知識が入り込んだ結果だと推測している。

『古事記』なども書かれた時代の原文は残されていないが、文体の研究から、奈良時代に書かれたことは間違いないとされているが、『富士古文献』は、古代の文体が残っておらず、時代を偽った「偽書」とされ、学術的には無視される。（「偽書」とは、内容が正しいかどうかではなく、書いた時代を偽った書のことなので、『古事記』は正しい歴史ではないにしても「偽書」ではない）一方、『富士古文献』は、徐福が直接書いたのではないにしても、何らかの歴史を反映する古文書や伝承があつて、それを基に書いたのではないかと考える研究者もいる。

いずれにしても福研究者にとってみれば、偽書であろうがなかろうが、徐福が登場する文書に興味を示し、これを解明したいと思うのは自然なことであろう。



富士古文献の一部である「支那震旦國皇代曆記」の書き出し部と最後の署名

- ・右は書き出し部分  
 全て漢字であるが、漢文ではなく日本語文である。助詞の「と」は「登」、「の」は「野」「に」は「仁」、「を」は「尾」の漢字が当てられている。
- ・左は最後の署名部分で、記述文は、「孝靈天皇の七十六年十月十日に、後世への記録として、秦国人除の徐福、謹んで書き置く。」  
 「安元二（1176年）丙申年八月中、寒川神社宝物蔵より借り受け写した。  
 山宮二所明神大社 大宮司 宮下源大夫義仁謹記」

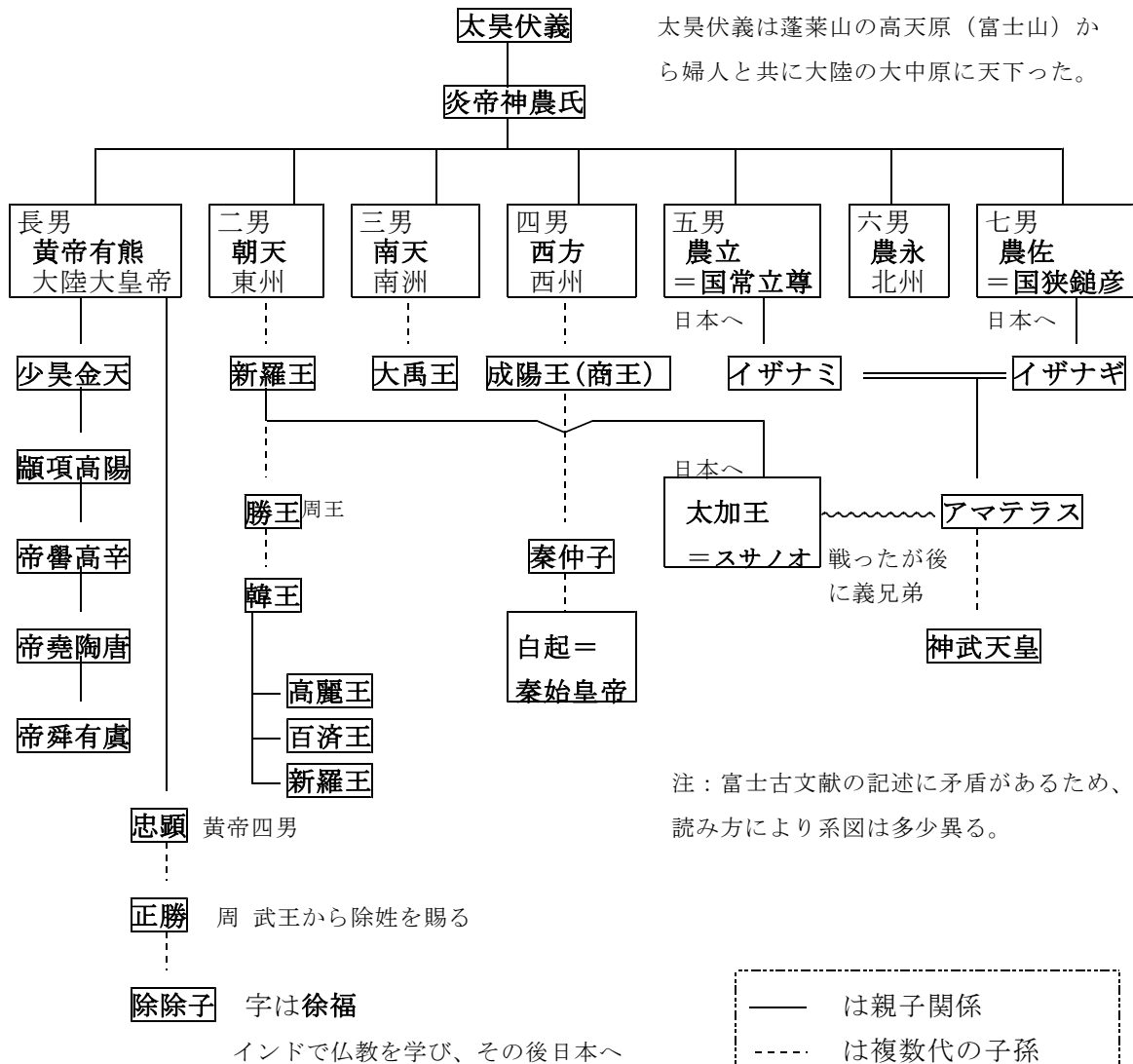
### 3. 『富士古文献』の日本と中国の関係に関する記述

『富士古文献』の内容で注意しなくてはならないのは、日中関係に関する部分に、とんでもないことが書いてあるが、少なくともこの部分は、明治時代のアジアの中心は日本だという歴史認識を元に書かれており、正しい歴史が反映されていることはありえないと考える。以下具体例を①から③に示す。

#### ① 中国皇帝や徐福の先祖は日本人??

徐福が書いたと記されている「支那震旦國皇代曆記」の書き出しの部分で、「蓬莱山の高天原（『富士古文献』では、富士山を高天原としている）から太昊伏羲氏（古代中国神話に登場する伝説上の帝王）は、東陽婦人とともに、大陸の中原に天下ってその地で炎帝神農氏を生んだ。」と書かれている。なんと中国皇帝の先祖は日本から行ったというのだ。その後の三皇五帝、夏の兎王、さらに日本の天皇家、三韓（高麗、百済、新羅）の王までがその子孫とされており、徐福もこの系図につながる。

『富士古文献』の「支那震旦國皇代歴記」「除除子系歴」「支那国歴記」などに記載された内容を簡略に示すと次の系図となる。



## ② 徐福は中国のことを「支那」と書いた??

支那とは、インド語の仏典を中国語に翻訳するときに、インド語の秦の発音に、「支那」の漢字をあてたとされている。日本では古くは一般的に中国のことを唐国（からくに）などと称しており、「支那」の言葉はほとんど使われていない。しかし明治以降、「清国」「中国」という名称があるにもかかわらず、日本は中国を支那と称して、日中戦争が終わるまで差別的に使ってきた。中国はこのような理由で「支那」の用語を嫌っている。いずれにしても紀元前の徐福が「支那」という言葉を使ったはずはなく、これも明治時代に書かれたことを示すものと言えるだろう。

## ③ 中国は何度も日本を攻撃した??

『富士古文献』の「支那震旦國皇代曆記」「神代軍師軍神武家略歴」などでは、中国の皇帝はたびたび蓬莱山島（日本）を攻撃したが、神皇は敵の大軍を皆殺しにするなどして防衛したと書かれている。「大陸」とは一般的には中国を指すものであるが、過去中国は、異民族国家である元朝時代の2度の元寇以外に、日本に攻め込んだことはない。これは考古学的にも、内外の古文献からも明らかで、議論の余地すらないのだが、なぜこのような発想に至ったのであろうか？

『富士古文献』の「支那震旦國皇代曆記」には次のように書かれているが、これも明治時代の思想が色濃く反映されていると言えるだろう。

有虞氏（黄帝の五代孫）は、蓬莱山（富士山）の豊葦原瑞穂の国（日本）は全世界の祖国であるので大陸に付属させようと思いたち、大軍を以てこれまで度々攻めたが一度も勝てずに大軍は皆滅びた。それで大王有虞氏は非常に怒り、本妻を始として貴婦人七人を召し連れ大船三百六十艘を造り、大軍を従えて東海に攻めて行き、大戦争になったけれども、全世界の開闢以来の神々が鎮座する蓬莱山に黒雲が現れ、風が吹出し、ついに大暴風になり、大王や貴婦人を始め、大軍はすべて大海の藻屑と消えてしまった。ここまでを支那開闢からの三皇という。この蓬莱山嶋豊葦原の瑞穂の国は全世界開闢以来の神々が鎮座されている国なので、諸々の神の神罰が下ったのだと、大陸を始め諸国の人々はみな恐れおののいた。

## 4. 『富士古文献』が書かれ時代

一部の『富士古文献』が書かれた（あるいは書き換えられた、以下同様）明治時代は、どのような時代であったのか。1864年の明治政府成立以来、日本は朝鮮、中国を侵略してきたが、これを正当化する思想が、日本を「アジアの盟主」とする「大東亜共栄圏」、「八紘一宇（天下を一つの家とする）」等の考えである。

『富士古文献』の一部は、このような時代背景の基に、書かれたのであり、筆者に政治的な意図はないにしても、結果として日本が世界の中心であるかのような記述になったのではないか。

何のために『富士古文献』は書かれたかについては、十分に解明されておらず、研究者によりいろいろな理由が言われている。その一つとしては、明治政府の神社の合併整

理である。国は明治初年と明治末年の2回、神社の合併整理を行ない、社格を整理するとともに、多くの神社を消滅させた。当時の神社にとっては存続の危機にあったので、自社がいかに重要で歴史のある神社であることを説明する必要があったので、このような文書が作られたのではないか。『富士古文献』全体から見ると、徐福に関する記述は一部でしかなく、天皇や神々の歴史、宮下家の系譜や、「阿祖山大神社」等の神社の話、宮下家が関わった南朝の歴史などが雑多に入っている。特に神社関係の記述では、全国の神社のトップに宮下家の「阿祖山大神社」が置かれている。

『富士古文献』を書いた理由は、単なる趣味の世界ではなく、明治時代の神社の生き残りをかけ、必死の思いからきていると考える。明治政府は神道を国民支配の手段として整理統合し、20万社あった神社のうち7万社が取り壊されたという。そうだとすれば、彼らも明治政府の宗教政策の被害者であり、歴史の中での苦しい立場を理解する必要があるだろう。

『富士古文献』の一部は、江戸時代までさかのぼれるとの意見もあり、また書かれた理由は、神社の水利権を主張するため、との意見もある。いずれにしても謎が多く、今後の解明が待たれる。

## 5. 『富士古文献』研究のこれから

『富士古文献』は、写真撮影したものが公開、発売されているので、ある程度研究が進んでいるが、膨大、雑多な文書の寄せ集めであり、まだ解明されたとは言いがたい。2013年12月3日に横浜で開催された、神奈川徐福研究会主催の「神奈川徐福フォーラム」で、『富士古文献』の地元、富士吉田の土橋寿氏は、「富士山徐福論－2千年の虚と実」を参加者に配布したが、このなかで宮下文書（富士古文献）に関しいくつかの重要な問題を投げかけており、今後の『富士古文献』研究の手がかりとなりそうなので、以下に転記する。

- ・徐福来麓時、縄文時代後期であるから、日本古代王朝があったことは、想像に難い。

記者注：最近の研究では、徐福の時代の紀元前3世紀は弥生中期とされるようになったが、それでもこの時代に古代王朝があったという歴史学者はいない。

- ・「平原広沢」とまでは言わないが、記述された地形は、王都と頼むには容積が乏しい。

- ・徐福一行の名簿が整い過ぎている。古代中国の人名とは似てもそぐわず、日本的であり、作意が漂う。

記者注：『富士古文献』には、徐福と共に日本に来た全員の名が記されているが、忠時、熊佐、清明、知明など、日本風な名前が多い

- ・徐福の家族名が上記に同じ。

記者注：中国から来た徐福の長男が福永、二男福満（後に福島と改める）、三男除仙（後に福山と改める）、など、日本風であり、しかも古代の人名ではなく、中世以降に多く現れる名前となっている。

・徐福の系譜が『史記』と違う。

記者注：『史記』では、嬴（えい）氏の子孫が分封され、その国の名を姓とし、徐氏、秦氏などを名乗った。（池上正治著『徐福』による） 『富士古文献』では、徐福の先祖は「炎帝神農氏（古代中国の伝承に登場する三皇五帝の一人）」としている。

・羅其湘氏により発見された徐福の家譜と違う。

記者注：羅其湘氏らは出土物などの調査から、徐氏の遠祖は、少皞顓頊（しょうこうせんぎょく）であるとした。（飯野孝氏共著『弥生の虹棧 徐福』による） 『富士古文献』の系図では、少皞顓頊と直接つながらない。

・記述の内容に、他の文献がまぎれている。例えば、「富士宮・浅間神社」社記ほか。

・記述の内容を傍証する文献が皆無である。

記者注：傍証とは、歴史資料を補強するのに役立つ証拠。『富士古文献』を裏付ける考古学的な発掘や、歴史文献がない。

・出土がない。

記者注：富士山麓に縄文、弥生の遺跡はあるが、『富士古文献』を裏付ける出土はない。

## 7. 終わりに

全国各地の徐福研究会は、日中友好のシンボルとして、各地の伝説の掘り起こしなどを行ってきた。また、伝説の研究だけでなく、歴史としてとらえることを佐賀県徐福会が進めており、期待が持てる。

歴史研究では正しい歴史認識が求められる。歴史認識の問題は近代史だけと思われがちだが、最近の古代史も歴史観の混乱が目につく。自国の文化だけでなく、他国の文化を理解し尊重することにより、初めて他国との友好が築ける。

徐福研究においても、歴史認識は注意しなければならない問題である。

## 参考文献

1. 『富士王朝の謎と宮下文書』 伊集院卿 著 学研 2014年3月  
富士古文献を支持する立場ではあるが、詳しく調査しており、富士古文献の概要を理解するには最適な書。
2. 『探求 幻の富士古文献』 渡辺長義著 今日の話題社 2012年12月16日  
『富士古文献』の紹介と解説